



勇者は逃れられない

搾り取られ専門サークル drain



「やっぱり男の子は、亀頭が一番敏感なものね？」

「止めて。お願いですから。お願いしますっ！」

「ダメよ。私が満足するまで搾りとってあげるんだから」

「やだっ！やめっ！止めて！」

「さ〜。シゴクゆよ〜〜〜♡♡♡」



「こういうのは好きだったかしら？」

「いやああああっ！！！！」

「男のくせにこんな声上げて、よがっちゃって！」

「あ、逝っちゃった♡♡」

「あ！あああ！見ないでっ！逝くところ見ないでっ！」

「ダー×♡♡」

「ほら、あっちで恋人の魔法使いが見てるゆよ」

「ああ！ああああ！逝ってる！もう逝ったから離して！離してえええ！」

「ダー×♡♡ 逝ってもシコシコは止まらないわよ～♡♡」





「クスクス」

「・・・恥ずかしい男・・・」

「勇者様。あなたは囚われの身でありながら、オネシヨをしたのですよ」

「えっ!? えっ!? えっ!?」

「もう少しグザマになって頂きますよ。勇者様。
腰を浮かせなさい」

「いっ! 嫌だ!」

「クスクス。今のは抵抗のおつもりですが?
貧弱というよりも、まるで赤ん坊のようですね。
もう少し足を開きませんか。
無理矢理力任せに開いてもいいのですよ?」

「くっ・・・っ! ぼ、僕の彼女に何をした!」

「足を開いたら答えてあげます。ふふ。そうとういい子でキュね〜。
いえいえ。タダの洗脳ですよ。死ぬまで解けないサキユバス化の洗脳をね」

「そ・・・そんな・・・」

「ではオムツを外す前に、股間についたオシッコを拭きとって差し上げます。
しかし、勇者様。
その前に私に言うことが有るのではありませんか?」

「・・・」

「言えませんか?

魔法使いの彼女に叱ってもらったほうが良いですかね?」

「・・・言えよ。お漏らし勇者・・・さっさとオネダリしろ・・・」

「お・・・おねしょを・・・してすみ・・・ません・・・」
「・・・ユ一リ。それでは、ダメよ。もっとはっきり。
どうして欲しいのと言わないと・・・」

「魔法使い女の言うとおりです。勇者様。
一度できちんと言えなかった罰を与えますね。」

『オネシヨをしてしまいました。
オマタをティッシュでポンポンしてください。お願いしまテユ』
とおねだりしてください。
これは命令です」

「そっ・・・そんなこと・・・」

「言えないと、彼女は永遠に元に戻りませんか？」

「う・・・」

「・・・言っテ。オネダリ・・・お願い・・・」



「う。お。お。お。オネシヨをしてしまいました。オマタを。ティッシュで。ポンポン。してください。お願いしま。ちゅ」

「クスクス」
「あんな安い嘘に乗るなんて。 (失笑)」

「うふふふ。だっさ〜い。嘘に決まってるでしょ？
お。パ。カ。さん♡」

「あ。う。」

「では行きますよ。ポンポン♪
ポンポン♪ ポンポンポン♪ ポンポンポン♪ ポンポンポン♪
オシッコまみれのおむつも“交換”しましょうね〜」